

日本構想学会 2003 年大会ラウンドテーブル (最高学院構想研究会 *)

本稿は 2003 年 12 月 6 日 13:00 - 15:30 東京国際フォーラムでおこなわれた日本構想学会 2003 年大会の同名ラウンドテーブルの全内容の記録である。

企画者

半田智久 (日本構想学会最高学院構想研究会)

指定発題者

江藤裕之 (長野県看護大学外国語講座)

遠藤洋史 (特定 NPO・NeoALEX 学術構想研究院)

小林麻実 (アカデミーヒルズ六本木ライブラリー)

鈴木良雄 (神奈川県立図書館)

長島慎治 (財団法人かながわ学術研究交流財団)

原田広幸 (アゴラソクラティカ)



このラウンドテーブルの趣旨

最高の学びを求めるうえでかなりの確実性をもって語りうるその基盤のひとつは、わが人類の知の遺産であり、わけても時代の風雪に耐え、いまなお生き続けている古今東西の良書 (グレートブックス) でしょう。その意義と価値はあらためて申すまでもなく、すでにその理解と認識のうえに、各所でセミナーやライブラリーが展開されてきています。とはいえ、この動きが日本で目に見えて起こってきてからまだ日は浅く、なによりその価値が求められるはずの教育の現場では、このグレートブックスに耐えうる時間と精神は、いまだこの先の課題として残されています。そこでこのラウンドテーブルでは、グレートブックスのセミナーやライブラリー展開に果敢に取り組んでこられた方々に集まっていたいただき、それぞれのコンセプトとデザイン、実践とおして得られた課題や今後のビジョンを紹介していただき、討議とおして相互理解を進め、あらたな構想にむけての示唆を

得つつ、同時にその成果を広く発信する機会にしたいと思えます。

半田 みなさんこんにちは。このラウンドテーブルの企画を立てさせていただきました半田智久です。はじめにわたしから発題者のみなさんの紹介をするべきところですが、すこしばかり欲張りすぎて、短い時間枠のなかで 6 名のご発題をお願いしてしまいました。のちの議論の時間も気になります。かぎられた時間を有効に使うことを優先し、不躓ですがそれぞれの発題の際に自己紹介をしていただくということでご了解いただきたく思います。

ではさっそくですが、それぞれおよそ 10 分程度を目安にリーフレットに書きました順で、発題者のみなさんからのご発題をよろしくお願ひします。そのあと参加者全員で発題を踏まえての発展的な議論をおこないたく思います。

江藤 江藤でございます。自己紹介からということですが、ハンドアウトにありますとおりで、専門は言語学ですが、いまから 7 年くらい前から、そこにすわっていらっしゃる長島さんのかながわ学術交流財団の委託研究というかたちでグレートブックスについて研究をすすめたり、実際にセミナーをおこなったりしております。

本日は半田先生のほうから、この 7、8 年間のグレートブックスのセミナーの理論的な研究と、実際のセミナーを実践してのぼくの経験から、ここでグレートブックスセミナーあるいは教養教育、リベラルアーツ教育ということに関して、このラウンドテーブルでのディスカッションの話題を提供してほしいということでしたので、簡単な

* 最高学院構想研究会は 2003 年 2 月～2004 年 1 月の期間に日本構想学会の研究会支援を受けて活動した研究会である。

お話をさせていただきます。

ぼくの一方的な話よりもみなさんとのディスカッションのほうに時間をさきたいと思いたいで、発表の方はかいつまんでおこなわせていただきたいと思いたいます。ぼくがつくってきたハンドアウトはすこし見にくくページ数もすこし多いのですが、きょう実際に使うのは最初の1、2ページだけです。あとのところはもし機会があればお読みください（編集部注 このハンドアウトにはぼに沿った内容が当学会機関誌『構想』2, 94-117, 2003に掲載されている）。

これはこれまでわたしが書いてきたものでグレートブックスに関連している資料を載せています。もし質問がありましたら、のちほど、あるいは電子メールのアドレスも書いてありますのでお問い合わせください。

さて、グレートブックスセミナーですが、最近インターネットで「グレートブックスセミナー」を検索しますと、いろいろと出てきますが、おもなものとしてほしい3つくらいがよくヒットします。ひとつはこちらの半田先生を中心とされ、構想学会などでもおこなわれているNeoALEXのグレートブックスセミナー、そちらの原田さんがやっておられる勉強会のセミナー、それから長島さんのかながわ学術交流財団のセミナーがあります。もっといろいろありますが、これらがよくヒットします。で、このグレートブックスセミナーというのは、これはもう事細かにいう必要はないと思いたいますが、アメリカで1920、30年代に、どうしても専門的、物質的なもの、どちらかという実利的なものに教育が傾いているときに、確かに世の中ですぐに役に立つ、もしくはお金儲けができるようなことではないけれども、もっとものごとの本質を考えなければならぬ、という運動からおこったことです。それでこのグレートブックスセミナーというのは古典、ブリタニカからでている西洋版のGreat Books of the Western Worldというのは西洋版の古典ですが、このなかからいろいろな書物を選んで、ダイアログ、とくにディスカッションを通じながら、その内容を理解し、そしてそれだけでなく異なる書物、もしくは異なる著者から共通のトピック、2000年、3000年の歴史のなかで変わることのない普遍的なテーマを現在という視点から見ながら、あるいはその古典が書かれた時代に足をおきながらみて

いくというセミナーです。詳しいことはハンドアウトをご覧ください。また、たぶんあとで原田さんなどからも出ると思いたいます。

結論を申しますと、総論ではこうしたグレートブックスS、古典を読むということは多くの皆さんから賛同していただけます。たとえば、大学で同僚にこうしたセミナーがあるという、「ああ、それはいいですね」とほとんどの方がいってきます。真っ向から反対する人はいません。それは古典との出会いからその人個人が自分の古典をつくるという、人生の書物との出会いのきっかけにもなることであり、あるいはそこから自分がものを考えていく、行動していくひとつの規範となるような、そういう書物と出会うという場ですから、それを否定する人はもちろんいないわけです。



ところが問題がいろいろでてきて、たとえば大学あるいは高校教育にかぎって見た場合に、どうしても時間的、空間的な制限がある。簡単にいえば、ほかにやらなければならないことがある。そういうなかで古典を悠長に読んでいる暇があるのか、というようなことがまずひとつ。それから読むといってもどのように読んだらよいのか、という具合に、総論は賛成だけでも、細かな方法論などで問題があり、順番をつけていくと最後になるというのが、これまでのぼくの印象です。

で、かながわ学術交流財団というところで、これはあとでお話があると思いたいますが、年に一度2日間、ないしは3日間のプログラムで大学生を集めて古典を読んでディスカッションをするというセミナーをここ5年ほど開催しております。ちょうど1週間前にわれわれやっただばかりなのです。今年は『源氏物語』という日本の古典をはじめてやりました。それまではアメリカでやられたもの

を模倣するかたちでやってきたわけです。で、やはり年に一回というのはパイロット的というか、モデル的なものでありまして、そこに来てくださった傍聴者の方々、半田先生もかつてそのお一人でありました、半田先生の学生さんもこられていましたが、そういう参加をされた方、あるいは傍聴された方が「これはいいものだ」ということで、少しずつ、草の根的といいますか、という感じで広まってきている。そういうことではかながわ学術交流財団のやっていることは意義があることだと思うのです。

ただこれをもう少しいろいろなかたちで広げていかなければならない。もっと大学や高校という教育の場でやっていかなければならない。それから図書館、あるいは書店がやってもよいでしょうし、いろいろな可能性があると思うのです。いまわれわれが余暇を過ごすとき、いろいろな過ごし方があるのですが、たとえばパチンコが非常に大きな市場になっている一方で本が売れなくなっている。まあいろいろな理由があるのでしょうけれども、そうしたことを考え合わせますと、こういったものはたいせつであるだけでなく、やはりやらなければならないことであろうと考えているわけです。

そこでぼくが今日ここで発題者のひとりとして問題提起しておくこと、ないしはぼくがいえることといえば、まず5年間ほど神奈川の学術交流財団のセミナーでモデレーターをやってきました。モデレーターというのは一言でいえば、司会者のようなものです。グレートブックスSというのは大学の講義ではありませんので、たとえば先生がアリストテレスやプラトンについて、こうだということを述べて、それを学生や聴衆が聞き、メモをとって新しい知識を得るということではなく、それぞれの参加者がそれぞれの立場、目線で読んできたその内容を語り合い、そして互いの意見を聞くことによって、さらに自分の読み方を判断し、見方を深めていくというものです。そうしたときにモデレーターの役割は非常に重要になってきます。単なる交通整理だけでもないし、単に知識を伝授するだけでもない。そこでのテーマについて非常に深い理解をもって、知見をもっているにもかかわらず、しかし学生に上から教え込むということをする、これはよろしくないということで、このセミナーのひとつの鍵が、このモデレーター

の問題ということになってくると思います。

ハンドアウトには「モデレーターの養成」という項目に書きましたが、これはこのセミナーを成功させていく上での非常に大きな鍵となっています。つまり同好の人が集まって「これはいいですね」という集まりでももちろんよいと思いますけれども、そうではなくそこにひとつの体系性なり、あるいは異なる本を読んでいって、そのなかにひとつの発見をするためには、指南役、舵取り役が必要で、それがこのセミナーを成功させる鍵となる。

それからもうひとつの問題ですが、いろいろあるなかで、このグレートブックスSを実施するときの方法論のひとつとして、われわれはモデルとしてアメリカで開発されたモーティマ・アドラーという先生が開発したセミナー、そしてこれはいまもアメリカのいろいろなところでおこなわれていますが、それをモデルにしています。ところが、わたしもアメリカにいた経験があるのですが、アメリカのモデレーターと日本のモデレーターの大きなちがいは、ほんとうはモデレートというのは、「まあまあみんな手を挙げていますが、ちょっと待ってください」というように調整していくのです。急に脱線したり、急に発進したり、そこから議論をはじめたりするのを制御するのがアメリカでのモデレーターです。ところが、日本の場合には、ここ5年間ほど通じてきて、どうもモデレーターというのは「あなたどうですか?」「あなたは?」というように指名役のような感じになります。だから、アメリカ人がどうで、日本人がどうだといいたいのではなく、やはり国民性のちがいであるとか、言語上の問題もあると思います。日本語というのは果たして討論に適したことばかどうか。そうしたいろいろな問題がありますので、それらを加味しながら日本人に合ったグレートブックスSの内容、システムをつくっていかなくてはいけない。ただ、集まって本を読むということでもひとつの目的は達せられると思うのですが、そこに究極の目的であるひとつの本を読むだけでなく複数の本、著者のなかから共通する問題をえぐり出して、それをみんなで確認し、語っていくためには、そのモデレーター、司会する人と進め方のノウハウが必要なのではないか、ということを感じています。

最後に、ぼくはいま大学で英語を教えています。

す。いまいる大学は看護・福祉系の大学でとくにこうしたグレートブックスとは縁のないところです。実学100%のところですよ。いま看護・福祉系の大学は日本のいろいろなところでできていまして、文科省が比較的簡単に設置認可をする数少ない例のひとつです。それはこういう世情に鑑みて必要なものですから増えているのですが、やはりそのなかでいろいろ問題がでてきます。将来看護師あるいは保健婦といった職業の分野で働く学生さんを教育していくわけですが、そうした学生さんたちにももちろん看護の技術のノウハウを教え込まなければならぬ、しかしそれならこれまでの看護学校で間に合うわけで、それを大学でおこなうということはどういうことなのかということを考えなければならぬ。新たな看護学というのでしょうか、実践から学問への脱皮をはかるひとつの過渡期をむかえている学問なのです。こうした分野でなく、たとえば社会学や文学ということになると過去の百年、二百年前に経験されたようなことをまさに経験するわけです。そういったときに現場に出て注射器をもてない、あるいは血圧を測れないような看護師は使いものにならないわけです。どうしても実践ありきということになります。そうしたことを中心にカリキュラムが組まれているわけです。そうすると極力、こうしたものはやっている暇がないから実習を入れた方がよいのではないかといった議論がでてきます。

そうしたなかでわたしのいる大学は幸い一般教養を大事にしようというところなので、許していただけるのですが、なかなか実践重視の大学では教養教育の時間がとれないという制約があります。しかし、学生をこうしたハンドアウトに示したような言語や学問の歴史に触れるセミナー、プラトン、アリストテレスから現代のソシュールなどまでのグレートブックスを読むことをつうじて、自分たちが看護でいまかかえている問題、たとえば看護というのはアートなのかサイエンスなのかという問題がある、あるいは看護というものは実際のところ理論なのか、実践なのかという問題がある。そうした問題がまったく別の分野からみえてきた、えぐりだされたといった感想をもった学生たちがほとんどでした。

ということは一見、無用なことのように見えるのだけれども、あえて時間をとってやることにこのグレートブックスセミナーというのは可能性を

秘めているのではないかと、思います。

それからわたしはある高校でアドバイザー的なこともしています。その英語の先生に英語に関するアドバイスをするというのを大阪のほうでやっていますが、そこでこのグレートブックスセミナーを導入しようとしたことがあります。そのときはその理事長はたいへん賛成してくださったのですが、現場の先生がたがどうしても大学入試と直接関係のないことをしても、ということではやはりだめだったのです。ところが、たとえば英文法を教えているときに、たとえば冠詞の話をするときに、抽象と具体的話になるとか、あるいは少し変な話ですが、どこかの国立大学、たとえば京都大学や東京大学の入試問題をやるときに、そこで使われている題材をもってきて、個別と普遍といった話題がなされているときに、そうした話をしていくことができる。最初からプラトンやアリストテレスをしましようといっても、物好きな生徒しかやってきませんが、こうしたかたちでいろいろな側面からグレートブックスあるいはグレートアイデアスといったものに触れさせて目を開くということとはできる。だから、可能性はいろいろある。

結論をいえば、セミナーや学校であれば授業、それを推進する教員、モデレーターの問題がまずひとつ。それともうひとつは日本人に合った、これは漠然とした問題提起になってしまうのですが、そういうシステムないしコンテンツを開発ないし発展させていくことが今後の課題ではないかと思っています。わたしはいまアメリカでグレートブックスを推進しているいくつかの団体と連絡をとりながら、日本的なグレートブックスセミナーの可能性を探っています。ありがとうございます。

半田 つづいてNeoALEX 学術構想研究院の遠藤洋史さん、お願いします。

遠藤 わたしたちはNPOとしてグレートブックスセミナーを実践してきています。代表の遠藤です。わたしは大学生ですが、このNPOは大学の研究室のメンバーが主体体になって組織され、活動しており、その活動の一環としておこなっているセミナーです。この時間はわたしたちが実際にどのような方法でセミナーを実践しているか、

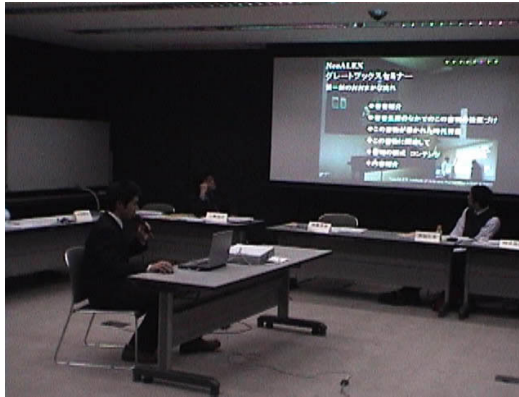
それを事例として発表したいと思います。

タイトルはデジタルプレゼンテーションを用いたグレートブックスの可能性ということでお話ししたいと思います。先ほど江藤先生からのお話にありましたように、グレートブックスセミナーの多くは参加者が基本的にテキストを読んでくる、そしてそれをもとにしたディスカッションをするというかたちをとっています。しかしわたしたちの場合は、ディスカッションのまえにデジタルプレゼンテーションをしており、まずそれを見てから議論をしましょう、というスタイルをとっています。

わたしたちのこれまでの実績は、いま画面に提示した具合でここ2年ほどのあいだに、数にして30数回ほどのセミナーを実施してきています。コンテンツの選定ですが、市民活動のなかでこれをしていく場合、参加者のほとんどはグレートブックスセミナーの歴史とか背景などを知らないことが多いものですから、どのようなものを知りたいか、という観点から選んでいったときに、こうしたラインナップになったということです。どれもそうですが、たとえばヒュームにしてもニーチェにしても限られた時間のなかでそのすべてを紹介することは、当然できませんので、当然のことながら部分的なエッセンス、や全体の概要ということになります。参加者は幸い、毎回20～30人です。また、これまでのグレートブックスセミナーではとりあげられていないように思いますが、童話を素材にしたセミナーも同様の形式をとっておこなっています。これは子育て中の主婦が受講対象で仙台市の社会教育事業との連携です。この場合も事前に素材を読んでくることは求めませんでした。ほとんどの参加者はすでに読んできていたことが特徴的で、すこしちがった経験をすることができました。

そのわたしたちのとっている手法をもうすこし説明します。さきほど申し上げましたように、セミナーは2部構成になっています。デジタ

ルプレゼンテーションによる内容紹介、これはプレゼンターがコンピュータを使いつつ、いまここでやっていますように画面の内容にそって説明していきます。これがだいたい60～90分です。わたしたちはこれを電脳紙芝居と呼んでいます。これを踏まえまして、これはどこのグレートブックスセミナーでもやっているように、ディスカッションを90～120分程度します。で、事前読書を要求していませんので、そのかわりにこちらとしてはそれを補完するための準備が必要になってきます。このように著者の紹介やその書物の書かれた時代背景、あるいは読解に際して知っておいた方がよいことなどを説明しています。そのうえで素材となる書物の内容紹介をしています。つまり、デジタルプレゼンテーション自体も大きく2部構成になっています。



このようにコンピュータを使うことの利点は、説明者がこれにそって説明するだけではなく、写真や図を使って説明を補完したり、拡張したりできるといったことはもちろん、参加者が同じテキストの部分に注意を集中できるということもあり、その文章を臨機応変に参加者に読んでもらう

ことで参加性を高める効果も期待できます。各自が本をもって輪読する場合との差異でいえば、画面に展開されるシーンへの没入観や場の一体性を期待できるということでしょうか。むしろそのためには画面づくりのクオリティの高さが要求されることとなります。

このわたしたちの手法をキーワードを使ってまとめれば次のようになります。これらには批判も疑問もあるかと思いますが、ぜひあとのディスカッションのときに指摘してもらいたく思います。

特徴の第一は基本は紙芝居であるというスタンス。参加者全員が物理的に同じポイントを見ているという状況は、場づくりにおいて重要なポイントになるように感じています。わたしたちのセミナーの場合は若い人はもちろん、主婦のかたからお年寄りまでさまざまな方が参加しますので、あとのディスカッションのことも考えて主題や話題

の共有、場の一体性や雰囲気づくりが大きな課題になっています。また、参加者の多様性はビジュアルを重視することでなんとか乗り越えることができるという感触も得ています。むしろこれは紙のテキストやレジメだけでおこなう場合との相対的な利点というところにとどまりますが、とくに書物の歴史背景などを説明するときにはビジュアルの効果はいかなく発揮されます。また、読解にあたっての基本概念を説明するときも図解することでだいぶ理解も促進されます。

まとめかたですが、これはどこのセミナーでも最近では似てきているかもしれません。なにを今日学んだか、という確認はせず、基本的にはそれぞれの参加者がそれぞれの要求を基礎にしてその場で新たな発見や気づきが出てくれればよいと思っています。ただ、それをディスカッションをとおして披露してもらうということは、求めていることです。

わたしたちの今後の課題ですが、学生主体でおこなってきたなかで、ある意味ではそれを理由にその身分をうまく利用してきたところもあったのですが、これからはそこから脱していかなければならないと思っています。これはグレートブックスセミナーの可能性を確認できたということがあったことを踏まえてのことです。そのための大きな課題として他機関との連携があります。これまでも図書館やいわゆる公共文化施設との連携をしてきましたが、こちらが求めている水準での連携はできませんでした。その水準とは広報や場の提供を含めての関係者との積極的な相互連携という意味です。それは多くの場合、江藤先生もご指摘されたように、グレートブックスやそれを素材にしたセミナーの価値に対する認識の低さに起因しているように思っています。図書館においてさえ、それが強く感じられてきたことはとても残念に思っています。

こうしたなかで今後わたしたちが連携先として課題にしているのは、公立のゾーンよりもむしろ民間企業で、とくに宿泊やテーマパークなどを中心としたホスピタリティ産業に注目しています。

最後にわたしたち固有の課題として特徴のひとつであるデジタルプレゼンテーションを今後、一層洗練させていかなければならないと考えています。たとえば、説明の際のツールにとどまらず、ディスカッションのなかでもこれを参加者とのあいだ

でインタラクティブに活用していくことなどは、今後のテーマです。

グレートブックスはそれが偉大なものであるだけに、高度な内容を基本にしていますが、それをそのまま受け止めてしっかりと頭を使っていくという方向のセミナーのあり方がひとつ、もうひとつはそこにある多くの珠玉の知をよりたくさんの人にできるだけ軽やかに伝えるためのセミナーがひとつあるように思っています。そのように分けるなら、わたしたちは後者を選択しているといえますが、そのためのよい意味でのエンターテインメント性の追求が、これは正統的な教養主義からは眉をひそめられてしまうところですが、テーマのひとつだと考えています。

それとひとつ付け加えると、さきほど江藤先生からモデレーターの養成ということが課題のひとつにあげられましたが、わたしたちはそれに関連して伝えるほうも同時にその場で学ぶということを毎回のセミナーの基本姿勢にしています。もっともこれは実際にやってみればすぐにわかるのですが、セミナーで一番深く学べるのは、それなりの苦勞をしてデジタル素材を制作し、なんとかそれを伝えようとするプレゼンターその人なのです。ですので、参加者のだれもがつぎはわたしにぜひプレゼンターをやらせて欲しい、という声を聞けるようになることがわたしたちの場合のひとつの到達点ではないかと思っています。以上です。ありがとうございました。

半田 つぎにアカデミーヒルズ六本木ライブラリーでディレクターをされております小林麻美さん、お願いします。

小林 私のおりますアカデミーヒルズ六本木ライブラリーと申しますのは、この4月にオープンしました六本木ヒルズの一番高い「森タワー」というビルの49階にある、会員制のライブラリーです。会費制ということでも、図書館界からはご批判を受けることが多いのですが、高い方の会員ですと1か月に6万円、安い方の会員でも1か月に6千円を頂いています。

このライブラリーは、森ビル株式会社という民間企業が運営しているのですが、会社側としてはメセナということではなく、むしろライブラリーという仕組みでどれだけやっていけるか見せて下さ

いというところですか。もちろん、大儲けをしようとは誰も思っていないのですが、少なくとも今の時代、自分に投資する、自分を磨きたいと思う、そのためには、月6千円払ってで、人と交わっていきたく考える人たちがいるだろう、それで事業としてやっていけないかというところを努力しているところですか。

今日、私がこちらにお呼び頂きましたのは、たぶんインターネットの私どものサイトに、うちのライブラリーはグレートブックスライブラリーという名のお部屋を持っているというのが出ているからだと思います。この部屋は高さ6メートルの書棚をもっておりまして、日本では類を見ないといわれる、非常にデザインの良いお部屋です。でも、たぶんみなさんが見にいらっしやると、中身が何もないじゃないかとおっしゃると思います。実際にそうできて、上の方は非常にガラガラしております。梯子をかけておきましたところ、上に登るお客様がいらして非常にあぶない、とか、またそこに何を置くべきかということで侃々諤々となったり、いろいろな事情がありまして、今はお恥ずかしい状態になっております。

そのあたりも含めまして、なぜこうしたライブラリーが始まったのかを、私の自己紹介も兼ねて紹介させて頂きたいと思います。

私はもともと企業の経営コンサルタントで、ナレッジマネジメントを専門にやってきました。ナレッジマネジメントとは、会社がどのようにしてお金を儲けていくのか、何をやっていったらよいのかを考える際、いろいろな「戦略」を考えていくよりは、「企業組織がどのように情報を伝えていって新しいもの（イノベーションですね）を起こすか」に着目するアプローチです。そういうことを考えていく中で、イノベーションには、本人にとって予想外の発見・セレンディピティが非常に重要だと考えるようになりました。

これには、私が当時勤務していたアメリカ企業での経験が大きく関わっています。ここでは、ライブラリーが持っていた本を50万冊全部廃棄してしまい、書籍上にあった情報をPDF等のデジタル情報に置き換えたり、あるいは他のライブラリーから借りてくることのできる仕組みを作る、ということをやってきました。このように本を捨てていく過程で、そもそもライブラリーというところはいったい何をするといいんだ、本があれ

ばライブラリーと呼べるのか、と考えざるを得ませんでした。多くの図書館は、——日本でもアメリカでもそうですが、たくさん本があること、しかも古い本があるということが偉いと思っているけれども、そうではないのではないかと、本があるだけならそれはただの倉庫、「アーカイブ」と呼ばれるべきだろう。「誰にも使われない本の倉庫」ではなく、ライブラリーと名乗る以上は、人が新しいものを創造するために、どれだけ効率的に情報にアクセスできる仕組みが作られてきているか、実際に結果としてどんな新しいことが生まれたのか、そうしたことをもう少し考えるべきな



のではないかと、思うようになってきました。

そうしたことを考えていくと、ライブラリーとか、グレートブックスが示す「風雪に耐えてきた人類の知の遺産」といったものは、何も紙になっているものだけではなくて、デジタルコンテンツもそうですし、人と人とが話すこともそうだろうと、ライブラリーの扱うべきものは拡張すべきであると確信しました。そして、そのような「知の遺産」とは、新しいものを作るために存在すべきだし、これはつまり学習、ラーニングに結びついていくと考えてきました。

このように、私はこれまで企業の中で、「企業がお金を儲けるためにライブラリーという仕組みを使えないか」ということを考えてきたわけです。そしてヒトが持っている情報の交換をシステム化しようとしてきました。が、いまの時代はそれこそアメリカの会社で働いていますと、企業が人を大切にしないということを痛感するようになっていきます。自分がいつ解雇されるかわからない中で、「あなたがいままで勉強してきたこと、知識として蓄えてきたことを社内でも共有しましょう」ということを言っても無駄だという気がしてきたので

す。

それで「企業」という枠の外を見た時に、「社会」というものがありました。その社会の中で企業を離れた人たちが個人個人で自律して学んでいける場、そういう場がライブラリーというものになるだろうと思いました。企業のライブラリーでなく、社会のためのライブラリーを作りたいという思いが、今現在勤めている六本木ヒルズのライブラリーになりました。このライブラリーでは、それこそ会社のように「あなたはクビですから明日からは来ないで下さい」ということはありません。会費制ですから会費は払って頂くのですが、払い続けている限りは一生でも会員でいられる。そういう安心感のあるコミュニティを作っていきながら、そのメンバーの中で知の交流を起し、それからまたその知の交流自体を題材として一緒に考えていけるような「場」にすることを目指しています。

ただこれは最初も申しましたように収益事業としてやっています。六本木ヒルズの49階という、ものすごく眺めのいい場所で、東京タワーを見下ろしつつ、真っ白い綺麗な空間を作り、24時間やっているわけですから、高いコストを賄いつつやっていかなければなりません。

そのためにはまず、今までのライブラリーとは全く違うのだということを訴える必要があると考えました。普通の人が図書館というものを考えたときに、一番文句があるのが、そこにある本が古くて面白くないということなんです。私たちのところは基本的に本は新しいものばかりで、一年以内に他の施設に寄贈してしまうことにしました。2003年の1月1日から出版されたものだけを集め、本がライブラリーの中で数か所をぐるぐる回って行って（本の置き場は頻繁に変わります）、1年経ったら寄贈して外に出してしまう。本は毎日、取次から50～100冊くらい入ってきます。それを「セレクトする」というところに図書館としての役割があると思っていますが、とにかく新しいものしか置かないということを原則とする。一般の人にとっては「図書館には古い本しかないが本屋さんに行けば、新しくてももしろいものがたくさんある」という気持ちが大いそうですね。もちろん、新しい本にはくだらぬものも多いのですが、新しいなりの魅力をもっているものが確かにある。今までのライブラリーというも

のは、そうしたところを大切にしていなかったのではないか、だから新しいものをどんどん集めていこうと。

そのかわり、その新しい本はこの場を共有する人の中で見ていくのだけれども、それを外に持ちだすとか、貸し出すということは一切しない。これはもちろん著者の権利ということもありますが、私たちはライブラリーというものを一人でじっと本を読む場所ではなくて、人と何かを共有するためにやってくる「場」としているからです。そうでなければ一人でアマゾンで本を買っていけばよいわけです。そうではなくて人はライブラリーに何かを共有したいからやってくるのだろうと私は考えています。ですから「ライブラリーブックストア」という本屋さんコーナーも作りまして、このライブラリーから持ち出したい時は定価で買って頂く、ということにしています。

他の特徴としては、セレンディピティを起こすために、わざとどこかの棚にどんな本があるかわからないようにすることを思いつきました—これは図書館の根本を揺るがす発想なんですよ。その例外的な場所としてグレートブックスがあります。

先ほどプラトンやアリストテレスを最初から読む人はあまりいないというお話がありましたけれど、6千円なり6万円なりを払う人の多くは、目の前のビジネスや勉強に忙しく、それどころではないというところがあるわけです。ただ、そういう実利的なところだけをやってはいけないうでしょう、というところでグレートブックスライブラリーという場所を作りました。これは竹中平蔵金融担当大臣がおっしゃられたところから始まっているのですが、先生はアメリカでのグレートブックスの動きをご存じで、実利的な話のほうばかりにいく世界でこそ、やはり教養的なバックグラウンドというものがあることは大事である、と。それが象徴的に目に見える形であるのは重要だということから、私たちにグレートブックス・ライブラリーを作るというアイデアを下さいました。

ただ実際には、先ほども申しましたように、ライブラリーが4月にオープンしてからこれまで、非常にシャビィな状態になっています。ここは当初、「最近発売された本で、今は評価が定まっていなくても今後グレートブックスと呼ばれるよ

うな本」を置く場所にするつもりでした。ただそれが難しい。50年後に何がグレートブックスになっているかというようなことを、私たちは会員の中でグレートブックス選定委員会というようなものを作ってみんなで決めていけばいいと思っていたのですが、これがうまくいかない。それは私たちのライブラリーが予定よりも半年ほど前倒しで始めてしまって、本当はこの10月からオープンするものを4月から、——ある意味では無理矢理オープンしてしまったところがあるので、たとえば、電源が足りなくてライブラリーなのに真っ暗で本が読めないとか、椅子も机も足りないといった、まったくプリミティブなところで非常に四苦八苦していたというところがあります。やっと今、私が最初に持っていたアイデアが、現実になったばかりで、これから当初のアイデアをどのように現実に合わせていったらよいか考える状況にあるのです。

他にも問題はあります。うちのライブラリーに集まってきてくださる方々は、個人としての意識の高い20代、30代の若いサラリーマン/ウーマンの方々なわけですが、この方々に今一番人気がある本は、キャリアや資産形成に関する新刊本なのです。株をどうするか、MBAをどのようにとりにいくか、そうした実利的な本に人気があるのです。

これは、非常に自分の人生を真面目に考えて現実社会と向き合っているからこそだと思います。と申しますのも、若い人というのは会社は自分を守ってくれないということに気づいて、これから勉強しようと思っただけなんです。で、自分を守ってくれるような資格とか、MBAとか通訳の試験とかを考える。そしてそれらをどこで勉強するかといえば、それこそ会社でするわけにはいかないですし、おうちに帰っても、日本の住宅事情では難しい。ひとりではサボってしまうところもある。ところが私たちのライブラリーに来ると、かなり綺麗な空間に、会社のあと夜11時までいられる。それから周りにいる人も、みんなものすごい勢いで勉強しているので、良い影響を受ける。朝8時から夜11時までもうペンの音が響くような静かなところで、みんながCPAなどをとろうとして勉強しているので、そういう状況になっていまして、つまりまだ多くの若い人たちにはグレートブックスへの欲求

というゆとりがないのです。

逆にもう少し年齢の高い別の会員カテゴリーになると、それこそ総論は賛成だけれども、いま目の前になんとか食べていかなくてはいけない、だからライブラリークラブの人的ネットワークが欲しい、と。現代の40歳代で、税金などの面で悪い影響を受けつつも必死になんとかご飯を食べていこうとしている人たちに向かって、グレートブックスの精神を訴えるというのは直接には儲からない、緊急度の低いものになってしまう。

私たちは自分たちが食べていくためにも、その6千円とか6万円という会費をいただくお客様のニーズを満たしていかなくてはならないわけで、お客様が全てです。これをどうやって満たすのか。六本木ヒルズ49階のライブラリーというリアルな場とバーチャルな場の両方を行っていきながら、ほんとうに何か新しいものをつくっていくのか、その新しいものとは、もちろん経済的な利益だけではなく、精神的な満足や文化的なものを含めてなのですが、どうやっていけばよいのかというところで苦闘しているという状況です。

半田 つぎに神奈川県立図書館の鈴木良雄さん、お願いします。

鈴木 わたしが今日ここに来ましたのは、かながわ学術研究交流財団のグレートブックスセミナーをどのように運営するかということに関しての研究会に参加してきたという経緯があつてのことです。なぜ、そうなったかのかは、いま小林さんがおっしゃったように図書館という場でグレートブックスセミナーを開催できる可能性があつたからです。とくにアメリカの図書館がひとつのモデルになっています。というのはグレートブックスセミナーというのはモルティモア・アドラー博士がアメリカで始めたということがあり、アメリカの大学にはリベラルアーツの大学があると同時に、グレートブックスファンデーションというものがあつて、そこでは対話による読書をおこなう場所をアメリカの場合は図書館に求めているということがあります。

きょうここでわたしは、図書館とグレートブックスとの関係をすこしみたいと思います。まずわたしは図書館の人間ですから、図書館をどう考えるかといいますと、いまの小林さんの話はおもし

ろく、わたし自身は共感しますが、たしかに図書館全体から見ると、小林さんのところは変わっているなあ、という印象が強いです。それはなにかというと、図書館というのはひとつの制度だと思ふのです。

アレクサンドリアの図書館でもそうですが、いろいろ図書館はあるのですが少なくとも近代に限ってみても、自分たちでお金を払ってアメリカの独立時代にお勉強するために自分で本を供出しながら、みんなで知識を共有して自分の生き方を求めるというのが18、19世紀のアメリカなのかなと思います。もともとそういうものがあって、その後それが19、20世紀になって国の制度が発達すると、国によって違いますが、図書館というのは制度化するわけです。それはどういうことかといえば、少なくとも日本では法的な制度になる。図書館といたしましてもいろいろありまして、たとえば国立国会図書館は国会に属しています。文部科学省とは別の体系になっている。それから大学にも図書館があり、それは大学の附属図書館です。一般的なのは公立図書館で、わたしのいるような神奈川県立図書館や東京都立中央図書館、あるいは東京には区立の図書館がたくさんありますが、そういう公立図書館がある。それから小林さんがおっしゃったのは私立図書館ですが、ある程度ファンデーションをもったところで、それが運営しています。

きょうお話するのは主として地方自治体が運営する公立図書館のことです。日本で実際グレートブックスセミナーをやる場合といっても、いろいろな問題点があるわけです。全体を考えてみますと、江藤さんがご指摘したようにモデレーターが非常に重要です。これはモデレーターがいないと、少なくともアドラーがいつているグレートブックスセミナーはなかなか成立しない。つまり、人が寄ってきて読書会をしましょうというのではなくて、中心人物がいて、その人の交通整理によって対話をつくりあげようということが必要になります。ただ好事家が集まって読書をするというのは全然意味が違いますので、モデレーターがいないとなかなか動かないという、これは江藤さんのお話にありました中心になる人の問題なのです。

それからもうひとつはテキストの問題、なにを題材にするかという問題です。これはかなり体系

化されておらず、完成したテキスト群はありません。対話によってその内容を理解しながらものを考えていくというのに、がちりしたテキストがありません。それから図書館に最も関係するのは、セミナーをやる場の問題があります。遠藤さんのプレゼンテーションにありましたが、宮城県図書館や仙台のメディアテークをお使いになっていますけれど、やはり図書館で実施する場合の問題点というのは、やはり公立というところがかなりネックになる。この特殊さを考えなければいけないと思うのです。公立は税金で運営しているわけですから、そういう組織や建物を使うということ



の約束ごとがある。

まずネガティブな面からいうと、まずグレートブックスの場合、古典を読みますという、一般的にはいいですね、という反応がでることは再三話題に出ていますが、これを図書館にもっていてもこれはすごくいい話ですね、ということになる。ところがこれをどうやるのですか、ということになると、モデレーターをどうするのかという問題があって、誰でもできるということにはならない。そこで神奈川の学術研究交流財団でも考えましたが、たとえば図書館の司書にモデレーターをやらしたらどうか、ということになる。司書ができないとはいいいませんが、だれでもできるかといえれば不可能な話ですので、これはモデレーターを養成しなければならず、単に図書館員にどうぞおやりくださいと言われても、できませんということになる。

それからもうひとつは会場を使うとなると、これは遠藤さんも経験されたかもしれませんが、図書館を会場に使うということはどういうことかという、これは公立の建物をグレートブックスを読む一般の人々が使うわけですから、いわばプラ

イベントに使うということですね。そうすると公的な施設をプライベートに使うにはそれなりの理由があるのです。神奈川県でいえば、少なくとも県民が均等に使っていなければならない。いくらグレートブックスの趣旨がわかり、理解できてもそういう判断は個人的にはできて組織としてはできにくいのです。これは環境のNPOの方とか、いろいろな方がいらっしゃいます、交流のために図書館の会議室を借りたいといった場合があります。そういうときに使用させるかどうかを判断しなければいけない。ただこれは将来的には図書館とNPOとの関係もかわっていくのができるかもしれませんが、いますぐにどこの図書館でもたとえば遠藤さんがいつて図書館を使わせてくださいといってもなかなかできないのが現状です。

逆にこれはメリットかな、というのは、今日は来ていませんが、横浜市の中央図書館の館長が主体となってグレートブックスの古典を読むという会をやったようですが、その場合も公的なところがこういうセミナーをやるということで市民にPRする、それは一定程度の理解は得られるというのは事実です。つまり、まったく私的になんか変な考えをもってやったというふうには思いませんので、少なくとも参加するかどうかは個人の問題ですが、公的なところが主催するということに対しては、一定程度に理解されることがある。これはメリット、デメリットの両方あるのです。

もうひとつ図書館というところでやった場合の問題点ですが、神奈川県で冊子体の「入門グレートブックス」を作成しましたが、これは非常にめずらしいかたちですが、神奈川県で刊行物として売ってありまして、まあ儲けはないのですが、これは神奈川県で学術研究交流財団のほうでグレートブックスセミナーをやっているということは、わかっている、それを支援するというか連携するという意味で図書館が所蔵している資料のなかから、たとえば古典・名著にかぎってまとめたもので、左の方にグレートブックス本体、右の方にリストがでている。これは図書館にあるものです。これは全部ではなく、ごく一部をセレクトして出している。もしこのようなグレートブックスといわれる古典を勉強したいという方がいた場合、こういうものを使いながら勉強できる。こういうことが県立図書館では可能かなと思います。うちの図書館の場合は社会科学、人文科学系で約68万

冊もあるんですね、もうひとつ神奈川県には川崎に科学・産業技術系の図書館があって、これは約21万冊、全体で約90万冊の蔵書がある。古典については、通常、人文科学系に分類されるので、神奈川県立図書館の宝庫といってもいい。ただし一般の方が来た場合、そういうものは書庫というところに入っていますから、誰でもとることができない、ということでこういう「入門グレートブックス」というものを使って、使いやすくするというのも、これは公立図書館の役割ということでやりました。

グレートブックスをどうするかということでは可能性はさまざまあると思いますが、現状のところではこういうことです。

半田 つぎに財団法人かながわ学術研究交流財団の長島慎治さん、お願いします。

長島 まず、かながわ学術研究交流財団というのは、どういった団体なのかということからお話したいと思います。わたしどもの団体は地球の未来、人類の未来を地域の切り口で考えるという理念のもとで活動している神奈川県主導の公益法人です。2代前の神奈川県知事の長洲一二さんの国際交流や理解を担っていく人材を育てていきたいという構想の下でこうした財団をつくりたいということで、十年ほど前につくられました。で、わたしどもの財団の事業ですが、学術研究と人材育成、交流、この3つの柱で事業をしております。これとグレートブックスがどういうかかわりをもつかということになると思うのですが、学術研究と人材育成の分野にかかわります。学術研究の分野ではグレートブックスの研究を平成7年からおこなっています。先ほどお話いただいた江藤先生をはじめとしまして委託研究というかたちですが、実践女子大学の松田義幸先生にチーフになっていただきまして「名著と学び」という研究事業ですが、グレートブックスの研究をおこなっています。その流れでは平成7年、これは公募のかたちでいただいた研究テーマですが、これをもとに7年から10年あたりにかけて米国でのアドラープログラムなどの先進事例の調査、それから日本でのセミナーの実施の可能性に向けての研究などをお願いしてございます。その研究成果のまとめとしてわたしどもの財団は略称でK-faceと

いのですが、K-face 叢書というかたちでグレートブックスの話題をひとつまとめました。

これは非常によくまとまっていてグレートブックスがこうしてものだということから、モデレーター役の役割、セミナーの進め方、それからとくに最後の第3部、グレートブックスカレッジの理念と方法というところは、江藤先生にセントジョンズカレッジの体験報告を書いていただきまして、アメリカでの先進事例をわかりやすく書いていただきました。

つぎの11年からの2年間にわたって、アドラー先生のプログラムを追体験するといったグレートブックスセミナーの検証ならびにわたしどものあたらしいオリジナルプログラム、幸福について、といったプログラムをつくってみました。さらに13、14年にかけてはさらにあたらしいプログラムとして、言語、思考、人間、あるいは歴史について、それから日本の古典を使ってセミナーをつくれないかということで、「世界文学としての源



氏物語」といったものを開発してきました。

こうした研究事業としてグレートブックスセミナーをおこなうかわらで、関連して人材育成事業として湘南国際村グレートブックスセミナーを年1回開催してきました。湘南国際村というのはわたしどもの財団が活動の拠点をおいております葉山と横須賀市にまたがる湘南国際村というところの名前をとってつけたものですが、これは11年度から開催してきています。学生さんをだいたい10～20人、傍聴の方をいれて40、多いときで50人くらいいらしたと思いますが、そういったセミナーを開催してきました。11年度12年度はアメリカ民主主義を基軸にしたセミナーを、13年度は先ほど申しあげたオリジナルプログラム「幸福について」をおこなってみました。14

年度は「言語、思考、人間について」ということで、先ほど江藤先生がご謙遜でアメリカのプログラムの模倣とおっしゃっていましたが、堂々とした江藤先生のオリジナルプログラムです。たいへん好評でした。さらに今年、つい1週間前ですが、「源氏物語」を軸としたセミナーを実施しました。こういった取り組みをこれまでおこなってきました。

今後、どのような展望をもって事業を展開していくか、ということになると思うのですが、たしかに1回のパイロット的なセミナーではなかなか拡がり望めないということであれば、何度もお話に出ているように、図書館とか大学、高校の教育、あるいはこれからお話をいただく原田さんなどの自主的なサークル、企業などのサークルへの支援といったものをどうにかたちで展開していくかということが、ポイントになってくると思います。それにあわせてモデレーターの養成です。これはもう何度もお話に出て、問題点はあきらかだと思えます。さらにわたしどもの事業の展開にかかわるものとしては青少年国際セミナーといったものを構想しています。これは高校生むけに将来的なリーダーを担っていくような若い人たちを育てていきたいと思っており、そのなかでグレートブックスの手法をとりいれて本の読み方、ディベート、ディスカッションの仕方を訓練していくといったことをしてみたいと思っています。

それから別の事業で国連大学との連携でグローバルセミナーというものをやっていますが、これは大学生を対象に実際の世界の現代の課題をとりあげてやっているセミナーですが、たとえば安全保障、国境、難民といった問題を1週間連続のセミナーのなかでとりあげているのですが、テーマ自体は現代的な問題であるとして、さらにグレートブックスセミナーとしてもっと普遍的な、たとえば国とは何であるか、自由とは何であるかとか、そういったものをテーマとしておこなってみたいと、これをグレートブックスセミナーの手法でおこなったらどうだろうかと、考えています。

わたしどものグレートブックスに対する取り組みがなんとか少しずつ広まってきたというところで先ほどのお話にもありましたが、横浜市の中央図書館のグレートブックスセミナー、これは生命倫理をとりあげているようですが、そういったひろがりもある。それから原田さんのアゴラソクラ

ティカというグループとの連携も考えていきたいと思っています。

最後に自己批判というか、これでよいのかな、と思っていることもつけ加えておきます。人材育成事業としてグレートブックスセミナーをしますというと、なにか将来のエグゼクティブ層の知的なアクセサリーをつけ加えるようなものであるとしたら、それはわたしとしては違和感がある。なにかもう少し暗さといったものを身につけてもらったらいかなと常々思っています。やはりグレートブックスセミナーの一種の明るさというのが何となく文学とか哲学などに興味を抱く人間のうさんくささとは少し相容れないようなところがあるような気がしています。これはあまり外ではいってはいけないのですが、個人的にはそんな感想をもっています。ぜひ暗い影の部分身につければよいのではないかと思います。ありがとうございました。

半田 つづいてアゴラソクラティカの前田広幸さん、お願いします。

原田 簡単なレジメを用意してありますが、それにそって話していきたいと思えます。グレートブックスセミナーま軌跡と可能性ということで、個人的な経験とこれからの可能性について述べたいと思えます。まず自己紹介ですが、好きな勉強をやってきたという10年間を過ごしまして、2001年に民間企業に就職しました。現在はそこで仕事をしながら、土日を中心にグレートブックスセミナーという活動をしております。

では、わたしどもがやっておりますアゴラソクラティカというグレートブックスセミナーをおこなうサークルの中身について入っていきたく思います。レジメに書きましたテキストはプラトン、アリストテレス、マキャベリ、ルソー、ジェファソン、ソフォクレスなどですが、これらはかながわ学術交流財団で第1、2回目で使ったアドラプログラムテキストです。わたしたちの場合、どのようなテキストを使っていったらよいかという話し合いをしたとき、こうした体系的なプログラムをつくっておこなうというのは理想型ではあるのですが、なにぶん経験のない素人が集まってやっているサークルですので、それは放棄しました。当面は1回1冊、基本的なテキストからじつ

くり読んでいこうと、いうことになりました。

で、最初はなにをやるか、という話になるわけですが、結局選んだのはプラトンでした。最初が『ソクラテスの弁明』以降、『メノン』『饗宴』『国家』、ソフォクレスの『アンティゴネ』が入りまして、『プロタゴラス』『テアイテトス』、そのあとデカルト、マキャベリ、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』、アーレント『人間の条件』、でカントが入りまして、やや近代のところまで手を伸ばしてきたという現状ですが、基本的にはプラトンを中心にしたテキストをやってきました。

プラトンからはじめたというのは、深い意味がありまして、まあ当初はそれまで深いところは考えておりませんでしたけれど、結果として振り返ってみると、3つほどのメリットがあったと思っています。ひとつめは現代の哲学者のホワイトヘッドという人が「西洋哲学の伝統はプラトン哲学の一連の脚注からなっている」という有名なことばを残しておりますが、そのことばに代表されるように、やはりプラトン哲学にはあらゆる哲学的議論の問題、クエスチョンが散りばめられている。ほかのテキストをやっているでもプラトンのテキストで取りあげられていた問題が必ずできます。その点でとっかかりとしては欠かせないテキストだということを実感しました。

もうひとつはプラトンの読みやすさということがあります。もちろんギリシア語を日本語に訳したものですので、正確にプラトンのいったことを理解しようとするとは非常に労力を要するし、100%理解するということはそもそも不可能かもしれないですが、それでも対話編、ソクラテスとソフィストなどとのやりとりというかたちで進められているテキストが多いのでわれわれとしては理解が容易である。とっかかりとして容易であったということがあげられます。

それともうひとつはグレートブックスセミナーの方法論そのものにかかわることですが、グレートブックスのやりとりが参加者の対話によって進められていくということに特徴があります。その対話のモデルはプラトンの対話編にあると思っています。どういう対話かといいますと、ソクラテスが問いを投げかけます。それに対して一方の人が答えを出す。それに対してソクラテスはまた別の質問をします。それに相手が答える。そこに矛盾が生じてそれを指摘する。その指摘を受けた人

は矛盾に気づいてその誤りを認める、そういうかたちで進んでいく。あるいは質問をしたところ、その人が考えてきたところが浮かび上がってくる。そうした話の展開になっている。これがグレートブックスセミナーの方法論であるとわたしは思っているのですが、いわゆるソクラテス的な対話法、法律学系の大学ではこういうことばもよく使われますが、まさにこれはグレートブックスセミナーの特徴であるのですが、プラトンを読むことでその方法論自体を学ぶことができる。そういうメリットがあります。これが一番大きかったと思っています。

グレートブックスセミナーの特徴であるソクラテス的な対話法というものがどういうものかをもう少し詳しくお話しします。3点にまとめられると思います。ひとつめは本質定義ということです。これはプラトンの著作を読んだ方はわかると思いますが、議論するものについてそれを本質的にいあらわす、その定義というものをソクラテスは執拗に求めるわけです。それをプラトンのように、アイデアにいきつくと思うのですが、たとえば蜂蜜とはなにか、ということ聞かれたときに、こういう蜂蜜もあれば、こんな蜂蜜もあるというぐあいに答えるのではなくて、あらゆる蜂蜜を蜂蜜たらしめているそのものは何かということ聞くわけです。わたしの個人的な哲学的な立場からいえば、そういうものは不可能だとおもっているのですが、あえてそうした本質というものから議論をスタートさせることによって、ぎろんそのものの焦点が明確になってくるわけです。これについてあだ、こうだと議論することがその問題にアプローチするひとつの方法になるということとして、哲学的な方法論として非常に有効なメソッドであるということを実感しています。

2つめは先ほども申しあげましたが、論駁法、ソクラテスのエレンコスというものがあります。質問をつぎつぎと投げかけて、それに対する答えの矛盾を指摘することによって、その人の誤りを指摘するという方法です。これは日本人の最も苦手とするところだとわたしは思っておりまして、こういう議論にも世間の人間関係をひきずってしまうわけです。それで相手を傷つけまいとして間違っていることを間違っていると率直にいえなことがあるわけです。しかし、ソクラテスの真似をしていくと、自然とそれができるようになる。

自分よりも40歳も50歳も年上のおじいさんに向かって、それは全然根本的に間違っていますとストレートにいえるようになるのです。しかも、いえないといけない。この論駁法によってソクラテス的にいえば、真理に向かう本質的な議論が可能になるというわけです。

3つめは、ソクラテスの産婆術です。これはメソッドとってよいかどうかわかりませんが、ある立場というか、考え方といえます。ソクラテスの母は有名な話ですが、本当に産婆だったらしいのですが、彼は自分のことを知識の産婆であると『テアイテス』のなかでいっています。つまり、自分が何かを教えるのではなくて、相手も持っているものを引き出すというわけです。これはグレートブックスセミナーではモデレーターの立場にある人がその役をするわけです。もちろん参加者がその産婆になることもあります。そんなとき立場の交換ができることはグレートブックスセミナーのよいところでもあります。主にモデレーターが産婆役となって、教えるのではなく相手から引き出すという発想のもとでおこないます。

このような方法論がとりあげたプラトンの著作そのものに見本がのっていますので、それをテキストとして数回やることでグレートブックスセミナーの方法論とコンテンツの両方を満たすことができたということが、主にプラトンを扱ってきたわたしたちのサークルの昨年度一年のもっとも大きな成果だったと思います。

つぎにこれからどのようにしていきたいか、という話をしたいと思います。ここで重要なことは何度も同じことを繰り返すということだと思っています。少なくとも半年間くらい、こうした方法論ののつとて継続的に経験する。それによってこのことが理解できるようになると思っています。このメソッドを理解すれば、モデレーターの不足という先ほどからあがっているグレートブックスセミナーを展開する上での問題点もある程度解消できるのではないかと考えております。つまり、モデレーターは大学の先生であるとか、専門家である必要はないということがわかってくるわけです。要はうまい質問をすればよい。相手の矛盾を突っついて相手から率直な意見を引き出せばよいということです。もちろん、そういうことが100人いたら100人できるというわけにはいきませんが、これは学者になれる素質とはちよつと

違う。モデレーターになれる素質をもっている人は学者になれる素質をもっている人よりも多いと思っています。その点で可能性は大きいと思っています。

こういう経験をサークル単位で活動して積むことによって、その人が別のサークルに入っていて、あるいは別のサークルを主宰し、別のテキストを使って同じことをするということによって、この活動は広がっていきと思っています。

レジメの方にはさらに、ソクラティックメソッドの特に重要な部分である論駁法を理解するうえで立場としてとらなければならない考え方を私見として述べてあります。これは簡単に説明することにどめておきたいと思います。つまり、これはディベートではないということと、自分の価値観や実体験にもとづいて必ず発言をするということです。それがないとグレートブックスセミナーというのは単なる大学や大学院での意見交換と同じになってしまう。そうではなくて、知識のうえでわかっているというものをぶつけるのではなくて、100人が100人違うと思っています、自分はそうだと思っていることはそのままいうことです。勇気をもって。あるいは自分が絶対に相手のいうことは間違っていると思ったら立場を越えて「違います」という、そういう立場、考え方をとりましょうということです。

最後に、グレートブックスセミナーの効用と成果ですが、これは思いついたものをレジメに書いてありますが、ひとつはショーペンハウエルの『読書について』から引っぱってききましたが、「読書は他人にものを考えてもらうことである」。何がいたいかといえば、単なる読書以上のことがこのグレートブックスセミナーを実施することによってできるということです。これはわたしたちの1年半から2年に近い経験のなかで全員が実感していることです。1回自分で読んだだけではわからなかったことが、わかるようになるという経験を何度もさせていただきました。これはディスカッションによる理解の深まりということだと

思っています。それともうひとつは共通の土台としての古典作品と書きましたが、同じ本を読むという経験がつぎのセミナーのときにまた生きてくるわけなのです。あの方にはこう書いてあったとか、あそこにはこう出ていたね、ということで非常に議論が盛り上がってくる。知識も深まってくるということがあげられます。

少年はなぜきれるか、とかことばの尊重と社会の共通のインフラといったことも書いておきましたが、最後にもう一点として、ことばというものを率直に語っていくということに対する、先ほど対話とは何かということでも申しあげたような立場というものが洗練されていくという効用があります。これはこのような資本主義の高度化した日本においてグレートブックスセミナーというものの

意味を考えるにあたって、大きなヒントを与えてくれると思うのですが、基本的にわたしは日本人全員が哲学やグレートブックスセミナーをやるべきだとか、やったほうがよいといったことはさらさら思いません。そもそもそんなことは無理だと思っています。



哲学をやるのは一種変わった人、半ば頭のおかしい人がやるわけであって、全員が実社会のことと関連がないと思われること、むしろやると自殺してしまう人がいるとか、頭が狂ってしまう人が実例としているわけです。いってみれば反社会性というものをもっていることを好きこのんでやる人というのは実際、あまり多くないと思います。ただ、マックス・ウェーバーという社会学者が禁欲というプロテスタンティズム特有の、一見するとお金儲けを否定するような人のなかから資本主義が発達してきたという逆理を示したように、哲学的に率直に自分の実感に基づいてものをいって相手と議論を戦わせるという、そういう議論のやり方というのは、効率性などを追求するいわば情報重視、過去のストックを重視するのではなく、フローを重視する、最新の情報を重視していく資本主義社会というものと対立するもののように思われますが、実は長い目でみるとそうではないの

ではないかという直感をもっています。

わたしはこうしたお話ししたような考え方をもとにしながら、まさに銀行という資本主義の、まあいまの日本では全然駄目なのですが、一応潤滑油としての役割を担うような企業に勤めています、その会社のなかでなにを実感しているかといいますと、お題目としての効率ということ、収益の拡大ということをいいながら、たとえば、効率性を重視するなら、意見の集約の方法とか知識の共有化の仕方とか、そういったものを深く議論していく必要があると思うのですが、そういったときにここでわたしが申しあげたような率直に嘘偽りのないものをストレートにぶつけあうというやりとりというものが根本的に欠けているのではないかと実感することが多くなりました。これは一瞬、企業というものの方向性を否定するとか、いま議論されている内容をひっくり返すというようなことにもつながる可能性があるのですが、そういう意味では危険性を内包しているとは思いますが、そうしたトレーニングがあまりにもない人が多いためにかえって効率性を議論しながら非効率を生み出す原因になっているのではないかと思うことが多くなってきました。そういう意味でももう少し、たとえばビジネスマンがこういったグレートブックスセミナーの方法論や哲学的な議論のやり方に接していただくことによって、ちょっとでもそういうことに関心をもってくれる人口が増えることによって、むしろ資本主義と対立するはずのこうした哲学的な活動というものが発展し、逆に日本の資本主義がまた活発になって発達していくというプラスの意味での相互作用が生まれるのではないかと考えています。非常に乱暴な議論ですがグレートブックスの効用、あまりにも大きな話なので自分でも話しをしていて恥ずかしくなるのですが、以上のような感想をもっています。そのほかにもいろいろお話ししたいことはありますが、あとはディスカッションにまわしたいと思います。

半田 みなさん、どうもありがとうございます。発題者の人数を少し欲張りすぎたため、みなさんには十分な時間をとっていただくことができなかったわけですが、それでも予定の時間枠でいいますと、ディスカッションに残されているのはわずか20分程度となってしまいました。これで

は話になりませんので、申し訳ありませんが、予定を30分ほど延長させていただければ幸いです。それでも50分ほどしかありませんので、このまま休み時間を入れずに、さっそくディスカッションに入りたいと思います。重ね重ね恐縮です。

多分今日、わたしはモデレーターという役割に近いところにいるのでしょうか、とりあえずモデレーションのまずさを披露しているようです。また、この日本構想学会のラウンドテーブルでは、先ほど最後に原田さんがおっしゃっていたような、思っていることを主客の遠慮なくストレートにいえる場、ということをお前提としています。そのため、よりよい何かを創り出すという思いを重視するあまり、いささか遠慮のない発言がわたしを含めて出ることがあるかもしれません。その点もご容赦願えれば幸いです。

まず、発題者の方々に十分な時間が用意できなかったため、聞いていた側としては疑問や聞き足りなかったところも多々あったかと思います。そのあたりから入っていきたいと思いますが、いかがでしょう。

猪岡 失礼な発言とはこういうことかな、と、思っていますが、率直な意見です。グレートブックスセミナーについてよくも活動に入って2年目になるのですが、基本的な考え方に自分との違いがみえました。たとえば、ぼくがNeoALEXというNPOでおこなっているグレートブックスセミナーでは、教育という位置づけとは別のところでおこなっています。さきほど原田さんがおっしゃったような、日本において決定的に欠けているような議論をぶつけあう場、という今ない場、日常的に議論がないとすれば、そうした議論をぶつけあう場が非日常的な雰囲気強いグレート



ブックスセミナーではあつてしかるべきだと思うのです。

学ぶことには大学受験や資格取得など、目的があります。グレートブックスに接近することに意味があるとすれば、目的を指向するということから離れて自分があることを認識するということに近づいていくということがぼくにはあります。まずは率直な感想です。

原田 わたしがいった効用のところでグレートブックスセミナーをおこなうにあたって教育的な効果を狙ってやっているということを感じられたのでしょうか。ああ、そうではないのですね。それならば別ですが。個人的な意見をいわせてもらえれば、そもそも教育的なプログラムとしてグレートブックスセミナーが始まった経緯があるということは認識しています。アメリカでも日本でもそうですが、しかしわたしがグレートブックスセミナーをやっている個人的な動機は、ただやりたいからやっているのです。グレートブックスの効用をいくつか述べましたが、それらは本当に狙っていることではないのです。そうした副次効果があればよい、と願ってはいますが、本質的なところでは、著作を読んで議論したいということ、ただ知りたいというだけの目的でやっています。それには個人的な営みではできないと思っていて、そのために議論する仲間が必要であり、場所が必要であり、願わくは先生が必要であり、テキストが必要であるというだけです。その結果が先ほどのようないろいろな効果を生んでいるということなのです。

鈴木 いま原田さんからお話しがありました。グレートブックスセミナーイコール教育というのは、本質的に違うような気がしています。たとえば、江藤さんはレジメのなかで学歴社会から学習社会へと書いておられますが、かながわ学術研究交流財団を立ち上げた神奈川県の前知事の長洲一二氏がいついたことなのです。これからの日本において、学習社会というものを想定しているということで、その学習というのも、いろいろなモチベーションがあつてよいと思うのです。資格を取ろうというのも、あつてよいと思うのですが、グレートブックスの場合はどんな職種にいても、まあテキストの話になれば、そこに

きつくともいますが、ものごとを本質的に考えるときに、どういうふうにするのだ、ということに適用されるのですね。たとえば、現役で活躍しているビジネスマンや公務員がいろいろな政策を実行する場合、限られた情報では隘路に陥ることがある。そのとき本質的にものを考えるときにどうするのだといったときに、現代的な課題を古典にかえて見直すと現代が見えるので、そういう意味では古典を読むということは現代を読んでいるということと同じになる。ですから、そういう意味で、古典を学ぶといっても、そこでラテン語を学ぶわけではないですから、動機はきわめて現代的でよいと思うのです。

ですから、それをたとえば学校でやりましょうということになると、一種のメソッドが必要で体系的にやろうということになります。しかし、たとえば、湘南国際村でやっているのも、原田さんのやっているのもそうですが、動機はいろいろあつたとしても、対話をつうじて古典の理解を深めようというのは、おのおのモチベーションが違うわけですから、自分の課題を解決するために理解を深めていくということなので、こういう場が現代社会にあればいいのではないかと、ということだと思います。そのときに図書館もひとつ可能性があるということなのです。

場というのはなにかといえ、やはり複数の人間が集まり、先ほど小林さんもおっしゃったようにコミュニティのようなものが必要だということ、どういうかたちであれ、意見を交換しなければ古典を読みこなすのは難しいと考えています。

平田 グレートブックスというのは、そんなにたいそうなものなのですか。というのは、ここに出されている本の名前は一例なのでしょうが、端的にいうと西洋の古典に偏りすぎている。それが果たして現代に役立つのだろうか、という疑問がまずひとつあります。というのは、ぼくの理解だと古代ギリシアとかローマから2千年からせいぜい4千年くらいでゆきづまってしまって、中世のヨーロッパは完全にだめだったわけですね。そこで何をしたかという、アフリカとアメリカ大陸とアジアに出ていって植民地をつくる、そこから収奪してもってきた富で産業革命をやる。それで石炭と石油を食い尽くす、そうやって200年くらいでもうこんなにゆきづまってしまっている。



そんなところにほんとうに人類が生きていくための知恵があるのだろうか、という思いがします。

わたしはそのなかにもたとえば、人間性や哲学に関してそれなりの知恵というのはもちろんあると思うのですが、聖書までがグレートブックスに入っているのでは、ぼくははなはだ疑問をもたざるをえない。どう考えてもここにならんでいる書名からいうといわゆる西洋文明、乾燥地帯における小麦・牧畜文明から生まれた文明、そこから生き延びるための石炭、石油の工業文明、そういうものをグローバルスタンダードと称して世界中に押しつけている欧米の文明の所産です。そういうものに対して、いやそんなものではなくて、もっとほんとうにこの地球のうえで人間が生きていくための知恵がいっぱいあるんだよ、そのためのグレートブックスなんだよ、というのだったら、すごく共感できるし、あしたからでもやりたい。と思うくらいなのですが、ここに並んでいる書名の選び方からすると、まあアメリカで発展してきたものだから、たぶんその影響があるのでしょうか、ここにリストアップされている書名についてはみなさんどういうふうにお考えなのでしょう。

江藤 まさにご指摘のとおりだと思います。われわれグレートブックスといったときに、さきほどプレゼンターの方から説明がありましたけれど、最初は方法としてこういうセミナーを導入していくということでアメリカで開発されたものをいれまして、その後、かながわ学術交流財団のほうでいろいろセミナーをおこなってきたときに、やはり同様の質問というのは毎年出てきています。要するに、西洋のものだけでなく東洋のものも、日本のものも、というわけです。それは確かに、そのとおりだと思います。ですから、ここでわれ

われ區別しているのは、全集版としての名著というアドラーが編集した『グレートブックス』というものと、そういう固有名詞ではなく、一般名詞としての「グレートブックス」です。その一般名詞としてのグレートブックスというのは個人個人にあると思うのです。ですから、これはグレートブックスですので、ここで書いてあることは金科玉条のように、ということではなく、やはり自分なりの古典というものを自分で発見していくということが、むしろ重要ではないかと思っています。

ただ、おっしゃられたことは確かにそうだと思いますが、これはひとつの型として提示されたものがあって、それをわれわれの風土にあうように入れて、今度はわれわれにあったグレートブックスを選定していく、あるいは理想をいえば個人個人のグレートブックスを選定していく、あるいはそういう選定をするときのきっかけになるような場になればよいと思っています。ですから、表記の仕方があると思うのですが、ここでいっているグレートブックスというのは普通名詞の要するに中央公論から出る世界の名著というのではなく、自分にとって重要な概念がそこにあって。自分が繰り返し読む価値がある本、そういった捉え方をわれわれはしています。

原田 わたしはあえてこうした西洋古典をやっている意味はあると思っています。テキストを選ぶにあたってグレートブックスというわたしの個人的な観点から選んだとしても日本とか東洋で選べる書物というのは限られていると思っています。もうひとつは資本主義などのゆきづまりやグローバルスタンダードなどへの批判として西洋の形而上学そのものが大きなひとつの原因であるという考え方は、ポストモダニズムなどの名のもとにいろいろ語られていますが、わたしはそういった批判というのは、あらたな発想を生まないと思っています。歴史の条件というものの積み重ねのうえにわたしたちが生きている以上、近代という枠組みのなかで生きているわけですし、その枠組みは自由主義であり、民主主義であるわけですが、それをつくってきたものはあきらかにこうしたグレートブックスのテキストにあらわれている西洋の哲学の歴史というものが大きかったと思います、しかしそういったものを批判するにあたって肯定するにあたって、われわれはこれを読

まなくてはならないということは大前提だと思うのです。そういった立場からすると、こうしたグレートブックスのテキストの選定に西洋の古典哲学がたくさんあらわれてしまうというのは、いたしかたがないとわたしは思っています。

世界各国を見回しても仏教国であろうが、まあイスラムは特殊ですが、世界中のほとんどの国が自由主義や民主主義をまっこうから否定するという立場をとっていないわけです。世界の状況があるわけでそれを見直すという観点からこのグレートブックスセミナーというものを位置づけるのであれば、西洋古典哲学が選ばれるのは当然であると思っています。

それとは別に、わたし個人的なテキスト選定のあり方というものを議論するにあたっては、別に西洋古典哲学に限る必要はもろくないと思っています。なにをやってもよいと思っています。世界の批判とか社会批判とか政治批判とか、それらをひとつの大きな目的としてグレートブックスを位置づけるのであれば、そうなると思っています。

半田 関連して、小林さんにお尋ねしたいのですが、グレートブックスの選定に関して、それを一度六本木ライブラリーでなさろうとして、うまくいかなかった、いま困難に直面しているということ、先ほどおっしゃられたように思います。もちろんお聞きしたところ、小林さんのところのグレートブックスというのは西洋古典とはかなりちがう観点から捉えられているということも理解できたのですが、そのうえでその選定がうまくできなかった背景は、どういうことだったのでしょうか。

小林 私どもは今の東京で、今年出版された本のなかからグレートブックスになりそうなものを残そうという考えでやってまいりました。まずコミッティをつくりましたが、その中でご推薦いただく本というのがほんとうにばらばらだったので、とりあえず日本語で発刊されたものの中でいったときに、まったく違った観点から推薦がくる。それこそ発刊されたものであれば、古典でも版が違えばよいではないかとおっしゃられる方もいますし、ある意味ではテキストにこだわること自体がおかしいと、チラシのようなものやラジオ番組のようなものとか、そうしたものがどうして

入ってこないのだというような議論にもなります。それらを誰も否定できないのです。どれが正しいといえない中で、私たちは個人個人が違うということを知った上で、ライブラリーメンバーというコミュニティの中、そのメンバーの総意というものができないか。これをトライはしてきたのですが、合意するところまでには至っていない。

もうひとつには、先に平田さんがおっしゃられたように、普通の人はグレートブックスというと古典的なもの、ソクラテスなどをまず思い浮かべてしまって、そこから離れられないということがあります。では他にどういうものがよいのですか、といったときにもう完全に出てこない。たとえばどういうものならば、明日からおやりになりたいのか、教えて頂ければ有難いのですが

平田 わたしはいま興味の対象が縄文の方に向いているので、あまり書物になっていない世界ではないかAと思っていますが、ただ、今年の夏、練馬区の文化財調査のボランティアで田柄用水というのを調べました。これは明治初期に田無の方から下練馬村まで17キロくらい引いた用水なのですが、それを歩いてみると、その用水にまつわるいろいろな文化が残っているわけです。もちろん水田がつくられ、水車が回され、野菜の洗い場があり、という世界なんだけれど、そういうところに文字の記録として残っていない人びとの知恵のようなものを、やはり丹念に拾っていく必要があるのだらうと思います。そうなるといまここのグレートブックスという概念とは全然ちがうところに、興味がいつてしまっています。単純にグレートブックスということでは、さきほど西洋に偏りすぎているといいましたが、グレートブックスとしてとりあげていこうと思うのだったら、どこかに偏ってはいけないと思う。偏ってしまったら入り口から間違っていると思う。

西洋の古典を読むのだったらそれと同等くらいのボリュームをもっているイスラムのコーランはなぜ入っていないのか、とか、中国にしても結局、ここであがっている中国というのは、北の黄河文明のものだけでしょう。そうでなく、長江の方の文明に関しても入っていないといけないと思うし、日本のものについても、たとえばここにある神奈川県のリストでは、仏教関係と国学といわれるところに偏っていると思うし、やはりそうでは

なくて、いろいろな分野のなかから1冊とか2冊、せいぜい3冊になるのか、そういうのを集めてきて全体をある程度、網羅してグレートブックスという複数になる。それくらいの全体の見渡しというか、そういうことをしたほうがよいのではないかと思っています。

原田 それは文化相対主義的な立場をとれということですか。

平田 そういうことではなく、地球のうえにはいろいろな人びとが住んでいるわけですね。だから、そのいろいろな人たちが生み出してきたものに目を向けるべきだということです。

原田 では、それで何が得られるのですか。たとえば、ぼくもコーランや中国古典を読みたいですし、それらの重要性を否定しませんが、そうしたものをグレートブックスでやることによって何を期待されますか。

平田 それは何かひとつのものを読むことで期待することと同じではないですか。

原田 そうではなくて、何か環境問題のようなものを意識されているのではないかと思うのですが。現代社会がゆきづまっているという問題認識に立てば、たとえば近代というものがもたらした弊害があるわけですね。端的な問題であれば、環境問題であるとか、貧富の差の問題などいろいろあるわけですが、それに対して処方箋をもし提示するのであれば、東洋の思想にも学ぶところがあると、そういう観点でおっしゃっているのではないですか。

平田 学ぶ必要があるといったことではなく、グレートブックスというのは要は人類がいろいろ積み重ねてきたいわば知恵を学んでいきましょう、ということなんでしょう。そうではないのですか。

猪岡 近代の問題を目の当たりにしてしまった気もするのですが、いまぼくたちは日本人でここにいますが、日本人でもちょんまげを結っている人がまだ何人かいてもいいと思うのですが、いな

いです。たぶん原田さんがおっしゃられている近代というものが、ぼくたちのまわりに普遍的にあれすぎていて、一番は頭のなかで考えている構造がそうあると思うのです。グレートブックスの選定にあたって平等にするべきだというのはそのとおりだと思うのです。でも、ぼくたちが考えている問題意識は、あらゆる意味での価値の一元化のようなことで、それは近代の発想によるものだと思いますが、それが心地よいものではないということに最近気づきはじめてきた……。

原田 逆なんですよ。それをもし見直すとか、問題意識をもっているのだったら、西洋哲学の伝統というものがそういうものをつくりあげたという前提に立てば、そのものを読まなければならないのではないですか、ということですか。

猪岡 ぼくの立場は敵を知って己を知れば百戦危うからずだと思っているのです。知るべき近代的な思考をつくってきたものは、やはり知るべきだと思っています。ぼくが近代にいきつくまでのことについて触れたかぎりでは、あらゆる意味で危険性に対して敏感になっていたと思います。たとえば、デカルトが近代的な素地をつくったといながらも、本人がそれに対して慎重に考えを進めていったというようなところが読んでとれます。だから、ぼくの個人的な立場は原田さんと同じなのですが。

遠藤 いまの話に関連するか、あるいは別の側面についてかもしれませんが、近代がどうという話以前に結局のところ、少なくともここにいる方々はグレートブックスというものが、まずは何かを知りたいという欲求から来ているものだということは了解していると思います。しかし、人はそうそうたくさんの本を読めるわけがない、いつでもそのときに読める本は1冊でしかない。で、わたしたちの思考をかたちづけているものが何かということを考えたときに、もしかすると確かに地方の名の知れない本を思い浮かべる方がいるかもしれませんが、少なくともわたしの頭に浮かぶのは、世間で何とかと呼ばれている本です。わたしがはじめてグレートブックスセミナーを担当したときはニーチェの『ツアラトウストラかく語りき』だったのですが、まずそこからはじめる

ということがありました。個人で学んでいるときは、その人の趣味でどんどん偏っていくということがあるのですが、小林さんがおっしゃったように本を語るということはコミュニティがつけられるということ、そのなかで本に対していろいろな批判が繰り返されるわけです。そうすると知りたいという欲求に忠実であるかぎりには、それになにが足りないのか、ということを考えざるを得なくなってくると思うのです。

わたしどもも近代の哲学の流れというものを確かにやってきたのですが、結局のところ、それらを通して学んだことと、それでは足りないということもいやがうえにもたくさんできました。批判というのはまさにグレートブックスの手法だと思のですが、それがグレートブックスをつうじて学んだことだと思います。さきほどわたしどもの実績で書かなかったのですが、そこで取りあげたのが、西洋哲学や西洋批判だけではなく、といいはじめて東洋の四書の『大学』をやってみたり、あるいはわたしなどはグレートブックスにまだ入っていないと思いますが柳田國男のしかも『妖怪談義』などというものをこれもグレートブック



スだといいはってやったという経緯もあります。

何がしたいかといいますと、コミュニティのなかでそうした批判が展開されると次が必要になってくる。そこでわたしどもはモデレーターをどうしようか、という話はこういうものを学んでいきたいという先に進む推進力というものを活かすところに尽きると思うのです。ですから、バランスがよいかどうかという議論は本当に全体を見渡せる人間がいるとは思っておらず、学びながらしかそのバランスは見えてこないのではないかとしか思えないところがあります。少なくとも学んでいるかぎりには自分の行為に慎重にならざるをえ

ない。つまり、環境問題など、なにかの問題に対して軽はずみなことはできなくなってくるというのが、あると思います。ソクラティックメソッドということがありました。自分が知らないということを知るといことも、まさにそういうところから来ているのではないかと、思います。そういう意味ではいまの瞬間が未来に通じているかどうかの境目はそこにあるのではないかと、思います。次に何を学びたいかといったときに、東洋が来るかもしれないイスラム世界が来るかもしれないのだけれども、それは結局いま学んでいるわたしたちの意欲のなかからしか生まれてこないのではないかと、何かが必要だから、というようなことはどうかな、と思うところがあります。

半田 やはりグレートブックスというものは謙虚になるというか、襟を正さざるをえなくなる書物だと思います。それは読んでみれば自然とわかることですね。ただ、それは表面的、参考書的にそこになにが書かれてあるか、ということを理解する仕方では、わからないことだと感じます。

どのようなグレートブックスでも、根気よく読んでみると、教科書的に誰が、いつ、どんなことを書いた本といった浅い理解が自分のなかにあったことを実感します。知ってるつもりになっていた、あるいは全然知らなかった自分に気づかされるわけで、その連続のなかで自分の無知をますますあきらかに知っていくという楽しみがあるものです。そういう奥深く広い類い希なる書物であるからこそ、いまも繰り返し刷られつづけているものすごく古い本なのではないかと、思えます。

鈴木 確かにグレートブックスとはなにか、ということはずかしい問題です。何をどう選ぶかといえば、人が百人いれば百様あっていいと思います。わたしたちの冊子で、グレートブックスをどのように選んだか、ということを県の出版物なので説明責任があるので、いっておきますと、グレートブックスというのは先ほど江藤さんがおっしゃったようにアメリカにはアドラープログラムというのがあり、ブリタニカには"Great Books of the Western World"という西洋古典の叢書があります。ところがこの冊子は日本で作成するのですから、アメリカとは当然事情が異なります。この冊子体では、中央公論社の「世界の名著」を

基本にして、岩波文庫、それから講談社の「人類の知的遺産」と学術文庫、中公文庫、筑摩書房の「世界古典文学大系」、筑摩文庫などを参考にしました。日本の古典の場合はこれも中央公論社の「日本の名著」をベースにし、岩波書店の「日本思想大系」などを参考にし、どれくらい取りあげられたかというのを計量的にやりました。それプラス高等学校の倫理社会の参考書、第一学習社の倫理社会資料集、中教出版の新選倫理資料集、こういうところで大きく取りあげたものを選んではいますので、個人で選んだというより、客観的、計量的に選んだ。そういうことで日本で古典・名著といわれているものは、おそらくこのへんではないかな、というのを少なくとも「入門グレートブックス」で取り上げた作品と人物については、バックボーンとしてもっています。

これがいいかどうか、というのは各人の判断ですからいろいろありますけれど、つまりわれわれは現在ここに来てグレートブックスとか世界の古典名著といったときに一般的にいわれるものが出ているということです。それは各個人にとって自分の人生にとって必要な本かどうかということは、まったく別のことです。神奈川県立図書館ではこれをもってグレートブックスのすべてというつもりはないのです。そこだけは誤解のないようお願いします。

大村 今日是最初に余暇の話ができましたけれど、私は普段はサラリーマンをしていて、まさにその余暇をよりよく過ごすために、この場に参加しています。以前かながわ学術交流財団のグレートブックスセミナーに参加したときに、余暇という概念が非常にだいじであるということに気づきまして、私もそうしたセミナーができればいいなと思い、NPO活動もおこなっています。今日はさきほどからたくさんすばらしいお話を聞くことができ、じつにすばらしい余暇を過ごしていると感じております。

さて、いま、洋の東西の本をめぐる討論が交わされています。「古代の本を読んでそれが現代にいかん役に立つのだ。」という問題ですが、私は高校生くらいのときから、古代や中世の哲学を読みつつ、この問題によく悩まされていました。

中世の哲学者にジャンバッティスタ・ヴィーコという人がいたらしいのですが、その人が、遠く離

れたところにあるまったく性質の違うものを結びつけて新しいものを生み出す力を、インゲニウムということばで呼んだと聞いています。たいへん訳しにくいことばですが、日本語に訳したときには、たとえば構想力と訳せるという話があったように記憶しています。

そうしたコンセプトからいまの議論をみていったときに、たとえば洋の東西では、その思想はある部分かけ離れているかもしれないのですが、それをわたしたちがじっくりみていって、それを自分たちで結びつけて、自分たちなりの新しい知恵なり知識なりを生み出していけたら、すごくおもしろいのではないかと、思いました。

それから、プレゼンテーションのなかでもインゲニウムという観点から感じるところがありました。プレゼンテーションということばには、発表という意味だけではなくて、贈り物という意味もあるらしいですね。じつは小林さんのプレゼンテーションを聞いていて、私はすごくいい贈り物



をしていただいたと感じたのです。

というのは、私もよく公共の図書館に行くのですが、来館者には閲覧できない書庫に書籍が隠されている、つまり情報がアーカイブになってしまっている場合がおおく、自分のほしい情報を引き出すうえで、不便さを感じることも多いです。

そういうなかで、小林さんのおっしゃる「ストックではなくフローに着目した」あたらしいライブラリーのあり方は、これまでの公共の図書館とはまさに反対のあり方であり、たいへん興味深いものです。

利用する側としては、こうしたあたらしいコンセプトをもったライブラリーと既存の図書館を、対立させるのではなくインゲニウムの結びつけ

ていくことで、あたらしい学びが可能になるのではないかと思います。それが具体的にどういふかたちになるのかは、これからじっくり考えていきたいと思っています。

加藤 『ダイナアーツ』というコンサルティング会社の代表をしております加藤です。コンサルタントの一人として、小林さんのプロフィールを拝見すると実は身につまされる感じがありました。仕事では、特に最近、お金まわりの話がとても多くて、ふつうの仕事ではドロドロの話ばかりです。はたと気がつくとき非常にまずいということを感じ出したのが、かれこれ5、6年前です。それからできるだけ、お金まわり、仕事、ビジネスとは違う方向性も自分の日常の中に持たなくてはならない…というようなことをわたし自身が志向しだした時代がありました。では今はそういう方向性をちゃんと持っているかという、なかなかそうでは行かず、片足をドロドロの世界に突っ込んで仕事をしている自分があるのですが、と同時に、さきほど原田さんがいわれたように、結果として効率を追求しながら非効率の状態にスタックしているという現実に気づきます。クライアントの企業の方々との接触が最近またドロドロになってきているので常々思います。

若干、余談のようになるかもしれませんが、企業の中には彼ら特有の言語の使い方があります。そのことばですべてを語ろうとするために、外部から見るとある種、言語障害をおこしているのではないかと思うことがよくあります。そうした人たちと半年以上つきあっていると、当初、言語障害を起こしていると感じた自分が実は、その違和感を感じなくなっているのです。つまり、自分自身も言語障害をおこして彼らのカルチャーの中にどっぷり漬かってしまっている。そうした危機感について、コンサルタントの仲間と、これはいったいどうしたものかな、と話し合う機会がありますが、異口同音に指摘されることとして、われわれ自身を感じたり、考えたり、伝えるという能力を自分自身で開発していないということがあげられます。では、感じて考えて伝える力とは何だろうと、それに適したことばがないのでわれわれの中ではリテラシーということばを使っています。それをどのように開発していくかということで、2年くらい前から少しずつ、50人くらいの組織

ですが、やっているのです。

恥ずかしながらグレートブックスセミナーという存在すら1年前までは知らなかったのですが、グレートブックスセミナーとわたしたちの取り組みには共通点があります。最近学校教育の中でいわれはじめている言語技術教育というものがあります。言語技術教育、すなわち、言語をうまく利用しながら考えたり、まとめたり、また表現したりしていくこと、その開発を、どうやって学校の現場で実践していくかということにトライアルしている学校が結構あるそうです。そうした言語技術教育とカリテラシーといったこと、このグレートブックスセミナーにはすごく共通項があるのなるほどと思います。それでひとつ質問ですが、そのリテラシーの活動をわれわれがしているとき、こういうことを原則にしているのです。自分がフィールドではないことに接して、そのことに対してどのようにディスカッションができるか、という取り組みをしているのです。たとえば、森



林浴、森林資源開発といったものを木こりさんがやっています。その方は、木の声が聞こえる、自然を感じるという活動をしているので、その場所に出かけていってその人の取り組みを聞き、自分たちが何を感じ、考えたかというディスカッションするのです。それはそれで、はちゃめちゃに、いろいろなことを話し合うこと、それ自体は楽しいのですが、気づくということとそれをとりまとめて考えるということは、一人ではできません。あることに対して、さまざまな質問が投げかけられ、さらにそのことについて、いろいろな方が自分の感じたこと、気づいたことを言い合います。そこで私自身気づきを感じるがあります。質問する、意見を言う、その時、こうした活動に出て来られる方々にはいろいろな人たちがいる、

フィールドがちがうし、問題意識のレベルもちがう、たいへん恐縮ないいかたをしてしまうと、教養教育のバックグラウンドもちがうし、たとえばそれが学生さんならまだいいですが、われわれの場合は老若男女さまざまですから、そうした中であるひとつのことについて話をする、話し合うというのは、それはとても大変なことだと思います。わたしはグレートブックスセミナーはいい方法だと思っているのですが、同様の大変さがあるのではないのでしょうか。その点で気をつけていることがあれば、あるいはこういうことに気づいているということがあれば、教えてください。ついでにもうひとつ、こうした取り組みを続けていかれる中で、参加される方々自身の、最初関わられたときの問題意識や動機、それは千差万別でしょうが、続けてこられたうちに、そうした問題意識や見方・考え方といったものが、どのように変わってこられたのか。参加される方々ご自身の中で、何がどう変わってこられているのか。ヒアリングなどもそれていると思いますが、どのような例があるのか、お教えてください。

原田 さすがに木こりさんはいないのですが、哲学などはまったくやったことがない主婦の方ですか、レベルということではいいですと、やはりディスカッションをしますので、共通の言語様式にしたがった議論が前提になります。だから、たとえば日本語がまったくできない人とか文字がまったく読めない人などはこうしたグレートブックスセミナーではむずかしくなるわけですが、ある程度の知識があるかないかのレベルの差でコミュニケーションを図るということに関しては、テキストにそくした問題をひろいあげてそれを質問としてぶつけることで

、それに対する個人的実感話を話してくださいと、それに対してつぎつぎと質問をぶつけることによって、自分でしゃべったことというのは覚えているので、それに対する共通点や矛盾点を指摘することによって、自分が考えていることを相手もわかるし、相互にわかるということはあると思います。

それ以上の、さきほど例に挙げられたような言語以外の木が話しかけるといったことに関する議論をどのようにしていくかということについてはむずかしいですが、おそらく関連していえること

は、グレートブックスセミナーでもルールを修得するということが経験をやるなかで必要とされますが、半年間ほど、つまり月1回で6回ほどつづけるとだいたい共通の土台でできるようになるという実感はあります。

江藤 この場合の前提としてちがってくるのは、まず学校という場でおこなっています。ですから、どうしても自由にどうぞといっても教える者と教えられる者という溝のようなものがあるというのは事実です。それから神奈川でやっているグレートブックスセミナーも専攻はばらばらでも、とりあえず大学生なのである程度、知的なレベルは均質化されています。それから鈴木さんのところの図書館での一般の方を対象にしたセミナーというのは、まったくバラバラの人ということで、それはぼくも体験したことがないのでこれはこれからの課題になると思います。ただ、ひとついえることは大学の公開講座のようなところで、これはグレートブックスセミナーではありませんが、そうしたものをつうじて、とくに神奈川では年1回しかおこなわないのですが、そのときにみなさんが書いてくれるのは、まさに加藤さんがおっしゃったように、「Ach! なるほど、そうか」という経験、ドイツ語でアッハ体験といいますが、それまで全然関係がないと思っていた遠くの向こうにあるものと思っていたものが、必ずしも自分の日常や経験に強引に結びつける必要はないのだけれど、なるほどと思ったことがとても多かつたということがありました。そうした小さな知的喜びというものを少しでも広めていきたいということがあります。やっけていてそうしたコメントや印象があると、こういうものをしている意味があるんだな、と思うことがひとつ。

ただ、そのように「Ach!」と感ずるのですが、さっきおっしゃったように自分がそう感じたということを言語化し、まとめなおして、それを伝えていくというのは技術がいると思います。これは最初からそうできればよいのですが、やはり訓練であろうと、思います。もちろん、自分の思っていることを伝えるには言語以外にもいろいろな媒体があると思います。絵を描いても、叫んでも歌をうたってもよいのでしょうか。でも、それをことばで論理的につなげていくというのは、バックグラウンドの差ではなくて訓練であると思いま

す。ですから。そういう場でもこういうグレートブックスをつうじて自分の意見を相手にわからせるようにいうというのは重要な、と、ただ、そのきっかけとして、自分で本読んでわからないと思っているのではなく、自分なりになるほどということが、多くわかったというのをいままでセミナーのアンケートなどを見るにつけ、とてもうれしく思いますし、材料はなんでもいいと思うのですが、「Ach!」という体験をこれでもってもらいたいというのはあります。

加藤　グレートブックスセミナーとは何なのか、ということをして1年以上まえにグレートブックスセミナーというものをはじめて聞いたときに、考えたりしたのですが、途中でもう考えるのはやめた、としてしまいました。下手に規定すると可能性を制約するような気もするし、でも、何かを問うたときに、こうした効能や効果があると口に出したとたんに陳腐なものになってしまうような気がして、わたし理解していないがゆえにですが。やはりわたしが一番気になることは、出られる方々とのように対応されているのかということです。適切なことばがないですが、出られる方々のレベル、クオリティによって手続きやファシリテーションが違ってくるような気がします。そのむずかしさをどのように克服されているのかということが一番お聞きしたかったことです。

遠藤　おっしゃるとおりだと思います。とくにレベルというか、とくに言語技術というものを考えたときに、やる前は相当楽観的に考えていたものですから、わたしどもたいへん苦勞したということがあります。主婦の方、仕事を辞められたお年寄り、学生、サラリーマンなどが来たことで、本当に違うということがあったのですが、結果的にはまず自分のことばで考えようという初歩的なところからはじめました。なぜなら、いろいろな所属の人がひとつのグレートブックスセミナーという場に出てきたときに、そこでのことばがちがうんだな、と思った瞬間に戸惑うということがないわけではない。だから、それを前提にとりあえず、自分のことばでいう、ということ、そこで伝わっているかどうか気づく、それがセミナーの効用のひとつになっているのではないかと思います。

しかし、それではすこし悲しすぎるということがありまして、まず話しやすい題材を選ぶということが必要になってくると思います。わたしどもははじめのころはとてもむずかしい哲学の本ばかりをやってきましたが、そのあと行政の方々と共同で童話を使ったセミナーをやってみました。これはだいたいやりやすくなりました。童話は基本的には子どもたちに読み聞かせるものだけでも、実は大人も子どもも相当語れる題材になっていて、レベルの差を考えたときにそれはヒントになるのではないかと考えています。たぶん、人生の違いなども子どもの頃ということではだいぶつながりをもてるのではないかと、とも思っています。

半田　遠藤さんのところにかかわっている関係で、つけ足させてください。このNeoALEXのグレートブックスセミナーの特徴のひとつにはデジタルプレゼンテーションということがあり、もうひとつに参加にあたり事前の読書を求めているということがあります。これはいわゆるアドラー型のグレートブックスセミナーからすれば、妙な話になるのですが、なぜ、あえてそうした方法をとっているのか、という理由が先ほどのご質問に



対する応えのひとつになっていると思われます。

ともかくグレートブックスといいうる書物は大きな書店でも図書館でも簡単にアクセスできる存在でありながら、多くの人たちからは現実的には遠い存在です。しかし、だからこそ決して少なからぬ人たちにとって気になる存在であるはず。だから、とりあえずわたしたちの最初のステップは「実は誰にでも身近なグレートブックス」というふれ込みにありました。できるだけ敷居を低くして参加してもらい、まずは、なにかそこで気づきがあればよいということです。そのうえで結局は自分でちゃんと読んでみなければわから

ないものなんだな、と思ってもらおう。そうして一歩、その領域に近づく機会をつくりたいと願ったわけなのです。

それともうひとつはモデレーターの役割がたいせつだということが今日も何度も指摘されましたが、わたしたちのセミナーではそのモデレーターというよりも、プレゼンターとしての役割に焦点をおいています。このグレートブックスセミナーで一番学ぶことができる人は誰なのか、といいますと、実際、プレゼンターとしてデジタルの素材をつくる人が最もよく理解できることになります。ですので、理想は参加者の全員が順にそのプレゼンターの役割を得て、いかにそのグレートブックスを伝えていくか、ということまで工夫し、苦勞してみることができればよいのです。そういう意味においてわたしたちもプレゼンターの重要性を強く感じています。

デジタルの世界は若者には身近ですが、年配者には総じて障壁が高い。だが、おこなっていることの基本は紙芝居にほかならず、それならば容易に手が出せる。読んで自分なりに理解して、感じたところを伝えること、とくにこの後者のところにグレートブックスがもつディスカッションに耐えうる深さが見いだせます。そこが満たされればデジタルであることはわたしたちの手法においても不可欠なことではありません。

きょうはグレートブックスセミナーにいろいろなかたちでかかわっている人たちからお話をいただきましたが、ほとんどはかながわ学術交流財団がおこなってきたグレートブックスセミナーに参加した人たちが、そこでの経験をえることで独自の展開につなげているわけです。そういう意味ではわたしたちは、かながわ学術交流財団から生まれた子どもたちです。したがって、まだ助走の段階にあるという言い訳で、グレートブックスセミナーにコミットしてきたわたしたちがこれからのような構想を描けるのかというビジョンを探りたいと思ったわけです。しかし、残念ながらそれを十分に眺望するまえに時間が来てしまったという事実をしっかり受けとめたいと思います。

大学をとりまく環境なども激変していますが、社会全体の学習環境もこの先ますます変化してい

くことでしょう。それがよりすぐれた方向への変化となるきっかけとしてこのグレートブックスセミナーや、先ほど加藤さんがおっしゃられたような学びのかたちが見直されていくはずだと思います。

わたしたちのグループはいま最高学院構想というものをつくりあげている途上にあります。このことば自体、たいへん議論を呼ぶところだとわかっているつもりでの提起であり、構想なのですが、この構想の一連の研究会のプロセスにおいてもこの先、グレートブックスに関連するテーマをとりあげていきたいと思っています。つぎの機会には、ぜひみなさんとビジョンを描けていけると希望しております。

原田 最後に、構想ということに関して問題提起があるのですが、ここには図書館や大学といった場所をもっている方が多くて、その場合のグレートブックスセミナーには問題がないのですが、わたしたちのようなサークルでやっていると、モデレーターのこと以上に場所の確保が問題になってきます。アメリカやフランスではカフェで哲学的議論ができるといったことを聞きますが、とてもうらやましく思います。わたしたちもスターバックスなどでおこなったことがあります。うるさくてあまり議論にならなくて、この際、自分で作ってしまおうかとも思っています。とはいえ資本もなく、うまく進みませんが、ぜひ、その前段階としてたとえば、小林さんのところの図書館でこうしたセミナーの企画をしていただくか、いままでのファシリティ以外での場を拠点にしたグレートブックスセミナーについてのアイデアを出していただくことも、これをめぐる構想ではないかと、思っています。

半田 グレートブックスセミナーはそれに対する理解からして、まだ日本では黎明期にあり、今後の可能性は大きいと感じられます。本日あげられた課題を携えて次の機会につなげたいと思います。予定を大きく延長してしまいました。長時間にわたり、どうもありがとうございました。

2004年3月1日 受稿